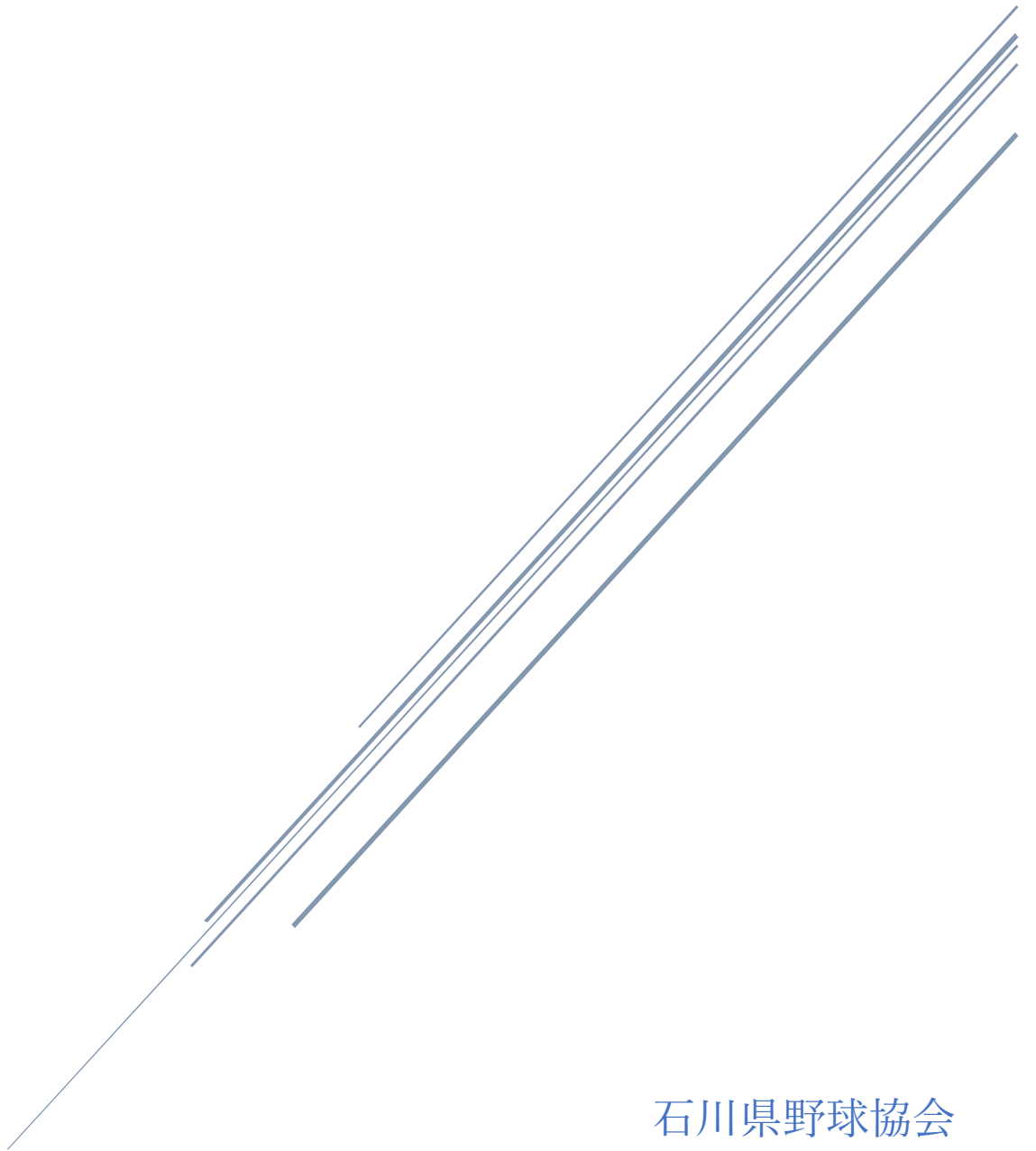


# 2020 年度野球規則改正



石川県野球協会

R2.1.27 2020年度 野球規則改正  
R2.2.4 少年部（中学生）の投球制限（全日本軟式野球連盟）

R2.2.19 サムライ審判アカデミー2020.3 追加

R2.2.20 2020年競技者必携修正箇所一覧追加

R2.2.20 アマチュア内規追加

2019 OBR (OFFICIAL BASEBALL RULES 2019 EDITION 令和元年版)

【MLB 規則】を確認して

2019年のOBRを確認すると（日本は2020年適用）規則に関して私たちにも共感する（青字）ところがありますので共有します。（ ）は私の補足です。

OBRまえがきには以下の内容が記されています。

- 1、MLB プロチームは本規則により試合を行うことを規定する。
- 2、アマチュアとノンプロはOBR規則と各連盟の専門ルールで試合を行うことを認める。（高校野球特別規則などのアマ専用ルール確認と十分な理解が必要です）
- 3、OBR規則で課される罰金はアマチュアには適用されない。
- 4、連盟の役員と審判はすべてのルールを厳格に遵守しなければならない。  
（審判のみならず運営スタッフもルールを知らなければならない）
- 5、プレーヤー、マネージャー、コーチ、審判と管理スタッフがルールの規律を尊重する限りベースボール人気は成長します。  
（ルールはすべてのプレイ関係者が尊重する）

OBR重要事項には以下の内容が記されています。

- 1、2014年12月の会議でOBR規則委員会は、野球規則の項目を試合の進行に合わせ再編成して、正文化することを決定しました。
- 2、1977年12月の会議でOBR規則委員会は、野球規則の中の適切な箇所にメモ／ケースブック（事例）／コメント・セクションを取り込むことを決定しました。  
基本的にケースブックは具体的な事例により規則を詳しく述べます。この構成（コメント・セクション）により規則に対する理解をより深め、他項目への参照を極力防ぐことが可能となりました。  
（MLBで数々のトラブルが発生してルールの理解が難しいことから、理解しやすいように事例・コメントなどが追加されました。今では審判員マニュアルに反映されています。）

2020 年度 野球規則改正（2020 年 1 月 27 日 日本野球規則委員会）

- (1) 5.05(a)(4)の末尾に次を追加する。  
 (走者については、6.01a11 参照)

5.05 打者が走者となる場合

- (a) 次の場合、打者は走者となる。

- (4) 野手(投手を除く)を通過したか、または野手(投手を含む)に触れたフェアボールが、フェア地域で審判員または走者に触れた場合。 (走者については、6.01 (a) (11) 参照)

【参照】

6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ

- (a) 打者または走者の妨害【英語では攻撃側の妨害「Offensive Interference」】

- (11) 野手(投手を含む)に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者に触れた場合。

【日本語では「守備妨害 Defensive Interference」】

ただし、走者がフェアボールに触れても、

- (A) いったん内野手(投手を含む)に触れたフェアボールに触れた場合「守備範囲」

- (B) 1 人の内野手(投手を除く)に触れないでその股間または側方を通過「守備範囲」したフェアボールに、すぐその後方で触れても、この打球に対して、他のいずれの内野手も守備する機会がない場合には、審判員は走者が打球に触れたという理由でアウトを宣告してはならない。

しかし、内野手が守備する機会を失った打球(内野手に触れたかどうかを問わない)でも、走者が故意にその打球をけったと審判員が認めれば、その走者は、妨害(インターフェア)をしたという理由でアウトの宣告を受けなければならない。(5.06c6、5.09b7 参照)

インターフェアに対するペナルティ 走者はアウトとなり、ボールデッドとなる。

	他のいずれの内野手も守備する機会	
	あり	なし
【基本】内野手に触れないフェアボール	インターフェア (走者アウト、 ボールデッド)	インターフェア (走者アウト、 ボールデッド)
【例外】内野手(投手を含む)に触れたフェアボール	ナッシング (アウトを宣告しては ならない。)	ナッシング (アウトを宣告しては ならない。)
【例外】内野手(投手を除く)に触れないでその股間または側方を通過したフェアボール	インターフェア (走者アウト、 ボールデッド)	ナッシング (アウトを宣告しては ならない。)

※側方の考え方：側方の解釈は、野手がもともといた位置のすぐ側方（すぐそば、ワンリーチの範囲）だけというのが一般的です。野手が打球を捕ろうとして数歩でも動いたのならば、側方を通過した打球という判断にはなりません。

(2) 5.05 (b) (2)【原注】を追加する。

【原注】投球が打者の身に着けているネックレス、ブレスレットなどの装身具にだけ触れた場合には、その打者が投球に触れたものとはみなさない。

#### 5.05 打者が走者となる場合

(b) 〈6.08〉 打者は、次の場合走者となり、アウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられる。  
(ただし、打者が一塁に進んで、これに触れることを条件とする)

(2) 打者が打とうとしなかった投球に触れた場合。

【原注】投球が打者の身に着けているネックレス、ブレスレットなどの装身具にだけ触れた場合には、その打者が投球に触れたものとはみなさない。

(3) 5.06 (b) (4) (I) 前段を次のように改める。(下線部を改正)

四球目、三振目の投球が、捕手のマスクまたは用具、あるいは球審の身体やマスクまたは用具に挟まって止まった場合、1 個の塁が与えられる。

#### 5.06 走者

(b) 進塁

(4) 次の場合、各走者(打者走者を含む)は、アウトにされるおそれなく進塁することができる。

(I) 四球目、三振目の投球が、球審か捕手のマスクまたは用具に (下線部分が 2019 までの表現) 挟まって止まった場合、1 個の塁が与えられる。

(4) 5.06 (c) (7) を次のように改める。(下線部を改正)

投球が、捕手のマスクまたは用具、あるいは球審の身体やマスクまたは用具に挟まって止まった場合——各走者は進む。

#### 5.06 走者

(c) ボールデッド

(7) 投球が、球審か捕手のマスク、または用具 (下線部分が 2019 までの表現) に挟まって止まった場合 — 各走者は進む。

(5) 5.07(a)(1)①および同(2)②を次のように改める。(下線部を改正)

打者への投球動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

#### 5.07 投手

(a) 正規の投球姿勢

(1) ワインドアップポジション

① 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。(下線部分が 2019 までの表現)

(2) セットポジション

② 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。(下線部分が 2019 までの表現)

(6) 5.07(a)(2)【注 2】を次のように改める。(下線部を改正)

(1)(2)項でいう「中断」とは、投手が投球動作を起こしてから途中でやめてしまったり、投球動作中に一時停止したりすることであり、「変更」とは、ワインドアップポジションからセットポジション(または、その逆)に移行したり、投球動作から塁への送球(けん制)動作に変更することである。

【注 2】(1)(2)項でいう「途中で止めたり、変更したり」とはワインドアップポジションおよびセットポジションにおいて、投手が投球動作中に、故意に一時停止したり、投球動作をスムーズに行なわずに、ことさらに段階をつけるモーションをしたり、手足をぶらぶらさせて投球することである。(2019 までの表現)

(7) 5.07(d)本文中の「投球に関連する動作」を「投球動作」に改める。

#### 5.07(d) 塁に送球 本文

投手が、準備動作を起こしてからでも、打者への投球に関連する動作を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。

(8) 5.09(b)(7)前段を次のように改める。(点線部を削除、実線部を中段から移動)

走者が、内野手(投手を含む)に触れていないか、または内野手(投手を除く)を通過していないフェアボールに、フェア地域で触れた場合。(5.06c6、6.01a11 参照)

5.09(b) 走者アウト 次の場合走者はアウトとなる。

(7) 走者が、~~内野手(投手を含む)に触れていないか、または内野手(投手を除く)を通過していない~~フェアボールに、フェア地域で触れた場合。(5.06c6、6.01a11 参照)

※(5.06c6、6.01a11 参照)はもともと OBR には記載されていない。

(9) 5.09 (b) (7)【注 2】の②全文および①冒頭の「内野手を通過する前に、」を削除する。

【注 2】① ~~内野手を通過する前に、~~塁に触れて反転したフェアボールに、走者がフェア地域で触れた場合、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。

~~② 内野手を通過した直後に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がその内野手の直後のフェア地域で触れた場合、この打球に対して他のいずれの内野手も守備する機会がなかった場合限り、打球に触れたという理由でアウトにはならない。~~

(10) 5.10 (g)の後段として次を追加する。

以下はマイナーリーグで適用される。先発投手または救援投手は、打者がアウトになるか、一塁に達するかして、登板したときの打者(または代打者)から連続して最低 3 人の打者に投球するか、あるいは攻守交代になるまで、投球する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、それ以後投手としての競技続行が不可能になったと球審が認めた場合を除く。

(11) 5.10 (m)を次のように改める。

①同(1)の(マウンドに行ける回数)「6 回」を「5 回」に改める。

②同(2)本文の最終の文「ただし、次の場合を除く。」を次のように改める。

ただし、すでにマウンドで行なわれている相談に途中から監督、コーチまたは野手が加わっても、新たな回数には数えない。さらに、次の場合もマウンドに行く回数には数えない。

③同(2)(B)を次のように改める。(下線部を改正)

野手が、投手と話すためだけでなく、単にスパイクの汚れを払うためにマウンドに行った場合。

④同(2)(D)を次のように改める。(下線部を追加)

攻撃側チームによる選手交代の通告後、投手が次の 1 球を投じるか、または、プレイをする前に、野手がマウンドに行った場合。

⑤同(2)(E)～(G)を追加する。

(E)審判員のタイム(たとえば、審判員や選手が負傷したり、観客、物体、または球場整備員がフィールド上に現れたり、あるいは監督がリプレイ検証を要求したときなど)による試合の中断の際、野手が試合の再開を遅らせることなく、マウンドに行った場合。

(F)フェンス越えの本塁打を打たれた後に、野手がマウンドに行った場合。ただし、打者走者が本塁に達する前には自分の守備位置に戻らなければならない。

(G)イニングの間および投手交代の間に適用された時間制限の中で、野手がマウンドに行った場合。

⑥同(4)を追加する。

(4)マウンドに行く回数制限の施行——監督またはコーチが、チームに与えられたマウンドに行ける回数を使い果たした後に、マウンドに向かうためにファウルラインを越えてしまえば、その救援投手の第 1 打者が打撃中でない限り、その投手を交代させなければならない。もし第 1 打者の打撃中であれば、規則 5.10 (g)により、その打者が打撃を完了するま

で投げ続けなければならない。

監督またはコーチが、マウンドに行く回数に例外が適用されると思う場合は、ファウルラインを越える前に審判員に確認しなければならない。

本規則の運用によって突発的な投手交代を行わなければならないとき、救援投手がブルペンでウォームアップをしていなかった場合、監督またはコーチは、マウンドに行く回数制限を超えて違反したことにより、試合から退けられる。この場合、審判員は、その救援投手に対して、試合に出場するために必要な準備の時間を与えることができる。

野手が、チームに与えられたマウンドに行ける回数を使い果たした後に、審判員に自分の守備位置に戻るよう注意されたにもかかわらずマウンドへ行けば、その野手は試合から退けられる。しかし、この場合、投手交代の必要はない。

(12) 6.02 (a) (1)を次のように改める。(下線部を改正)

投手板に触れている投手が、5.07 (a) (1)および(2)項に定める投球動作に違反した場合。

#### 6.02 投手の反則行為

##### (a) ボーク

(1) 投手板に触れている投手が、投球に関連する動作を起こしながら、投球を中止した場合。

(2019 までの表現)

(13) 補則「ボールデッドの際の走者の帰塁に関する処置」(I) (e) (2) 本文を次のように改める。(下線部を改正)

フェアボールが、内野手(投手を含む)に触れる前に、フェア地域で走者または審判員に触れた場合。または、フェアボールが、内野手(投手を除く)を通過する前に、フェア地域で審判員に触れた場合。

(14) 9.01 を次のように改める。

①同(a)の2段落目を次のように改める。(下線部を追加)

記録員は、ホームチームにより割り当てられた新聞記者席内の所定の位置で試合の記録をとり、記録に関する規則の適用に関して、たとえば打者が一塁に生きた場合、それが安打によるものか、失策によるものかなどを、独自の判断で決定する権限を持つ。

②同(a)の4段落目以降を次のように改める。(下線部を改正)

クラブ職員およびプレーヤーを含むすべての人は、その決定について記録員に異議を唱えることはできない。

記録員は、あらゆる記録を決定しなければならない。記録員の判断を要することが起きたとき、記録員は、プレイの進行に沿って次の打者が打席に入るまでに記録を決定するように最善の努力をする。記録員は、その裁量で、試合終了後あるいはサスペンデッドゲーム宣告後 24 時間以内に、当初の決定を最終の決定とするか、変更するかを決定する。

メジャーリーグのプレーヤーまたはクラブは、試合終了後あるいは決定の変更後 72 時間以内に、書面または認められた電子的手段によってコミッショナー事務局へ通知して、運営

部門責任者に記録員の決定を見直すように要求することができる。(以下省略)

③同(c)後段を次のように改める。(下線部を追加)

記録員は、その任務の遂行にあたり、監督、プレーヤー、クラブ役職員、報道関係者から侮辱的言動を受けた場合には、いかなるものでも然るべきリーグ役職員まで報告しなければならぬ。

(15) 定義 76 の最終段落として次を追加する。

本定義では、プレーヤーが身に着けているネックレス、ブレスレットなどの装身具は、プレーヤーの身体の一部とはみなさない。

(16) 定義 80 を次のように改める。(下線部を追加)

プレーヤーまたは審判員の身体はもちろん、着用しているユニフォームあるいは用具(ただし、プレーヤーが身に着けているネックレス、ブレスレットなどの装身具は除く)のどの部分に触れても「プレーヤーまたは審判員に触れた」ことになる。

以上



## 「フェアの打球が走者に当たる」ことに関する規則の整理

### 【規則変更内容】

#### 5.09(b)(7)走者アウト

##### ●2019

走者が、内野手（投手を含む）に触れていないか、または内野手（投手を除く）を通過していないフェアボールに、フェア地域で触れた場合。

この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。（5.06c6、6.01a11 参照）

（以下省略）

##### ●2020（案）（黄色部分変更）

走者が、フェアボールに、フェア地域で触れた場合。（5.06c6、6.01a11 参照）

この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。—(5.06c6、6.01a11 参照)—

（以下省略）

#### 5.06(c)(6)ボールデッド

内野手（投手を含む）に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者または審判員に触れた場合、あるいは内野手（投手を除く）を通過していないフェアボールが、審判員に触れた場合——打者が走者となったために、塁を明け渡す義務が生じた各走者は進む。

走者がフェアボールに触れても、次の場合には、審判員はアウトを宣告してはならない。なお、この際は、ボールインプレイである。

（A）いったん内野手に触れたフェアボールに触れた場合。

（B）1人の内野手に触れないでその股間または側方を通過した打球にすぐその後方で触れても、このボールに対して他のいずれの内野手も守備する機会がなかったと審判員が判断した場合。

#### 6.01(a)(11)打者または走者の妨害

野手（投手を含む）に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者に触れた場合。

ただし、走者がフェアボールに触れても、

（A）いったん内野手（投手を含む）に触れたフェアボールに触れた場合

（B）1人の内野手（投手を除く）に触れないでその股間または側方を通過したフェアボールに、すぐその後方で触れても、この打球に対して、他のいずれの内野手も守備する機会がない場合

には、審判員は走者が打球に触れたという理由でアウトを宣告してはならない。

しかし、内野手が守備する機会を失った打球（内野手に触れたかどうかを問わない）でも、走者が故意にその打球をけったと審判員が認めれば、その走者は、妨害（インターフェア）をしたという理由でアウトの宣告を受けなければならない。（5.06c6、5.06b7 参照）

インターフェアに対するペナルティ 走者はアウトとなり、ボールデッドとなる。

## 【考え方と事例】

1. 「走者がフェアボールにフェア地域で触れた場合」の考え方（2019OBR 改正の趣旨と思われる）
  - ① 2019 年の OBR 改正は、「**走者が、フェアボールにフェア地域で触れた場合、アウトになる。**」と**いうことが原則であること**を明らかにしたもので、これは今までの日本の解釈を変更するもの。（MLB アンパイアにおいては見解が分かっていたらしい。）
  - ② そして、例外として、次のケースは、走者がフェアボールにフェア地域で触れてもアウトにならない。
    - a) いったん内野手（投手を含む）に触れたフェアボールに触れた場合。
    - b) 1 人の内野手の股間または側方を通過したフェアボールに、すぐその後方で触れても、この打球に対して、他のいずれの内野手も守備する機会がないと審判員が判断した場合。この 2 つのケースは、いずれも守備側のミスしたボール（ボールに触れる、トンネルなど）まで避けることを走者に課さないというものと理解できる。
2. 5.09(b)(7)の訳
  - ① 2019OBR では、“touch”が削除され、“pass”が“gone through, or by, an infielder and no other infielder has a chance to make a play on the ball”に変更された。これは、上記 1 の①の原則を明らかにする改正と思われる。
  - ② 訳文については、“**gone through, or by, an infielder** and no other infielder has a chance to make a play on the ball”は 5.06(c)(6)及び 6.01(a)(11)と同じ表現であるため、直訳すると「走者が、1 人の**内野手の股間**または**側方**を通過する前で、かつ他のいずれの内野手も守備する機会がないフェアボールに、フェア地域で触れた場合。」となる。
  - ③ ただ、この訳文は分かりにくい。そこで、意識になるが、「走者が、フェアボールに、フェア地域で触れた場合。」という原則のみを書く案を考えた。この案では、“touch”（いったん内野手（投手を含む）に触れたフェアボールに触れた場合）が OBR から削除されたことを反映し、5.06(c)(6)及び 6.01(a)(11)を合わせ読むことにより理解する（合わせて 1 本）という考え方である。
  - ④ なお、もともと公認野球規則にある「(5.06c6, 6.01a11 参照)」を、規則改正の趣旨を明らかにするために、今回改正する第 1 パラグラフに移動することも検討したい。
3. 「打球が 1 人の内野手の股間または側方を通過する」(“the ball has **gone through, or by, an infielder**”)の解釈（プレイのイメージ）
  - ① 「**股間を通過する**」ということは、いわゆる「**トンネル**」のことであり、誰でも簡単にイメージできる。
  - ② 「**側方を通過する**」ということの「**側方**」とは、どのようなプレイのことを示すのかを明らかにしたい。その前提条件としては、「守備側のミスしたボール（エラーが記録されるプレイ）まで避けることを走者に課さない」ということになるが、MLB の解釈に合わせなければならないと思われる。

【MLB 解釈（日米でのルール解釈の違いの原因を理解する）】

（前置詞「by」は「近接」むしろ、「すぐそば」という感覚です。日本語の「側方」は「（前方・後方に対して）左右の方向。また、側面。わき。」「側方」という日本語の単語の意味は単に「方向」を指していて、英語の前置詞「by」が持っている「近接」「すぐそば」という距離的ニュアンスまでは表しきれていないです。）

日本語のルールブックに「by」の訳として「側方」という言葉が使われている以上、そのような解釈になってしまうのは致し方ないとは思いますが、しかし、本来のアメリカ野球（≡国際大会）とは異なった解釈であるということは理解しておく必要があります。アメリカの解釈では、綺麗に野手の間を抜けていくような打球（野手の頭の上を抜けていくような打球）に走者が当たった場合は、その走者がアウトになります。

【事例】1out、走者1・3塁です。内野はスクイズ警戒で、二塁手・遊撃手もダイヤモンド内に位置していました。次の投球を打者が打ち、ゴロで一二塁手の間を抜きましたが、塁線の少し後方を走っていた一塁走者が打球を避けきれずにぶつかってしまいました。

【解説】一塁走者アウト。ボールデッドで三塁走者は三塁に戻される。打者は一塁へ。

確かに内野手が極端な前進守備をしていたので、他の内野手はこの打球に対して守備機会はなかったかもしれませんが、一塁手・二塁手の「すぐそば」を抜けて行った打球ではありません。

ルールの大原則は走者は打球に当たってはいけないのです。

以下は、野球審判員マニュアル（MLB アンパイアマニュアルを訳したもの）に書かれているケースである。

- 例題（1）（P146）（2019MLB Umpire Manual 例題（1）P10）
  - 【例題】1アウト走者2塁。打者は3遊間にゴロを打った。3塁手は打球をカットしようとした。（The third baseman charges in on the grass to try to cut the ball off）ショートは3遊間深く打球を捕ろうと動いた。走者は3塁に向かっていて、打球は3塁手に触れることなく3塁手を通過し（The ball gets past the third baseman）、走路上で当たった。ショートはこの打球に対してプレイしようとしていた。
  - 【裁定】2塁走者はアウト。打者走者には1塁が与えられる。打球は内野手を通過したが（The ball passed by but was not touched by an infielder）、走者に当たる前に投手以外の内野手に触れていない。しかし、走者の後ろで他の野手が守備する機会を失した。
- 例題（5）（P147）（2019MLB Umpire Manual 例題（5）P11）
  - 【例題】走者1・2塁でダブルスチール。打者はバントの構えをし、1塁手および3塁手は前進守備し、ショートは3塁のカバーに入った。打者はバントをせず打ち、ゴロとなってショートの定位置に転がった。しかし、ショートは3塁のカバーに入ったため、誰も守備することができなかった。このとき打球は2塁走者に当たった。
  - 【裁定】2塁走者は打球に当たったことでアウトが宣告される。打者走者には1塁が与えられる。このプレイでは、打球が内野手を通過したとはみなされない。（The ball is not considered have gone through or by an infielder in this play）

- 例題（6）（P147）（2019MLB Umpire Manual 例題（6）P11）
  - 【例題】走者1・2塁で、1塁手及び3塁手はバントに備えて前進守備。このとき走者はダブルスチールをした。打者はバントと見せかけて打って、打球は**前進守備の3塁手の頭を超える**高いゴロ（チョッパー）となった。（The batter hits a chopper **over the head of the third baseman who was in about 20 feet**(注：訳6 m)）打球は2塁走者に当たった。2つのケース：
    - （a）ショートは打球に守備しようとしていた。（b）ショートは打球を守備する位置にいなかった。
  - 【裁定】（a）のケースでは、2塁走者はアウト。打球は3塁手を**通過したが**（The ball is **considered going by** the third baseman）、他の野手が守備する機会があった。（b）のケースでは、打球はインプレイの状態に置かれる。打球は3塁手を通過し（The ball is **considered going by** the third baseman）、他の野手も守備する機会がなかった。
  
- 例題（7）（P147）（2019MLB Umpire Manual 例題（7）P12）
  - 【例題】走者1塁でヒットエンドラン。打者は2塁手の定位置方向にゴロを打った。（2塁手は塁ベースカバーに行き、そこは空いていた。）打球は1塁走者に当たった。
  - 【裁定】1塁走者は打球に当たりアウト。打者走者は1塁。この場合、打球は野手を**通過したとみなされない**。（The ball is **not considered having passed through or by** an infielder in this play）
  
- 例題（9）（P148）（2019MLB Umpire Manual 例題（9）P12）
  - 【例題】走者1塁。1塁手は走者の前で守備していた。打者は1塁手の横にゴロを打ち、**1塁手はそれを捕ろうと飛び込んだが、捕れず**、（Batter hits a ground ball **just outside the reach of the first baseman as the first baseman dives to his right.**）その直後打球は走者に当たった。
  - 【裁定】この場合、打球は**内野手の横を通過したとみなされる**。（In this play the ball is **considered having passed by** an infielder）審判員は他の内野手に守備する機会があったかどうかを判断する。あれば、走者はアウト、なければ、そのままインプレイである。

参考（2019MLB Umpire Manual まとめ P13）

まとめ：次の場合を除き、故意ではなく打球に当たった走者はアウトとなる。

- (1) ボールが内野手にすでに触れた場合
- (2) ボールが内野手を通過(すなわち内野手の股間または守備しようとした内野手の側方を通過)し、かつ**他の内野手が守備する機会がなかった場合**。また、走者は、たとえボールが野手に触れて進路が変わったとしても、打球に対して守備しようとしている野手を避けねばならない。

なお、打球が野手を通過していたかどうかは、走者が打球に触れた地点が、野手とファウルラインを垂直に結ぶ線よりも前か後かで判断する。

- ③ 上記の例題から検討すると、例題（1）は3塁手にエラーが記録されるプレイかどうかかわからないが、例題（9）は1塁手にエラーが記録されるプレイではないと思われる。このようなことか

ら、野手が捕ろうとしたがグラブのすぐ横を抜けた打球（頭上の打球を含む、ヒットが記録される）に走者が触れたケースでは、即アウトにはならない（他の内野手に守備する機会があったかどうかを判断する）と解釈できないか。

#### UDC ルール解説より

例題1 一死満塁で、内野手は前進守備のシフトでした。打者は三遊間にそれほど強くないゴロを打ちました。これを遊撃手は横っ飛びしましたが、打球に触れることができませんでした。（側方を通過したフェアボールではない）しかし、2塁ベースを大きく離塁していた2塁走者は三塁へ進塁しているとき、この打球が足に触れてしまいました。

この瞬間三塁塁審は「タイム」を掛けプレイを止めました。守備側のチームから「守備妨害」のアピールがあり、4氏審判員で協議し、2塁走者に「インターフェア」を宣告しました。すると、攻撃側はすでに守備会を失った打球に当たったので、守備妨害でないとアピールしてきました。

解説1 守備妨害である。※米国≡国際ルール

確かに、公認野球規則 **6.01(a)(11)打者または走者の妨害において**

野手（投手を含む）に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者に触れた場合。

ただし、走者がフェアボールに触れても、

- (A) いったん内野手（投手を含む）に触れたフェアボールに触れた場合
- (B) 1人の内野手（投手を除く）に触れないでその股間または側方を通過したフェアボールに、すぐその後方で触れても、この打球に対して、他のいずれの内野手も守備する機会がない場合には、審判員は走者が打球に触れたという理由でアウトを宣告してはならない。

再度のルール上の理解（「側方」とは）

『側方』という日本語の単語の意味は単に「方向」を指していて、英語の前置詞「by」が持っている（もともと内野手が位置している場所の）「近接」「すぐそば」（ワンリーチでの範囲）という距離的ニュアンスまでは表しきれないです。

## 投手の投球動作に関する規則改正の検討

規則	2019 年版公認野球規則	改正案
5.07(a)(1)① P42 下から 5 行目	打者への <u>投球に関連する動作</u> を起こしたならば、 <u>途中で止めたり、変更したりしない</u> で、その投球を完了しなければならない。	打者への <u>投球動作</u> を起こしたならば、 <b>中断したり</b> 、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。 ※OBR の“interruption”を「中断」を訳す。
5.07(a)(1) 【注 2】	投手が <u>投球に関連する動作</u> をして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること以外は許されない。したがって、走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、投手板をはずすこともできない。違反すればボークとなる。	現行のままとする。 ※ボディスイング（投球動作）を伴わない、主にヒジから先を動かして両手を合わせる動作は、「投球に関連する動作」とする。
5.07(a)(2)② P44, 3 行目	打者への <u>投球に関連する動作</u> を起こしたならば、 <u>途中で止めたり、変更したりしない</u> で、その投球を完了しなければならない。	打者への <u>投球動作</u> を起こしたならば、 <b>中断したり</b> 、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。 ※OBR の“interruption”を「中断」を訳す。
5.07(a)(2)② P44, 10 行目	この姿勢から、 <u>中断することなく</u> 、一連の動作でセットポジションをとらなければならない。	現行のままとする。 ※ここも OBR では“interruption”という語を使っているが、従前から「中断」と訳している。
同【注 2】 P44 下から 3 行目	(1)(2)項でいう“ <u>途中で止めたり、変更したり</u> ”とは <u>wind-up</u> ポジションおよび <u>セットポジション</u> において、 <u>投球動作中に、故意に一時停止したり、投球動作をスムーズに行わずに、ことさらに段階をつけるモーションをしたり、手足をぶらぶらさせて投球することである。</u>	(1)(2)項でいう“ <b>中断</b> ”とは、 <b>投手が投球動作を起こしてから途中でやめてしまったり、投球動作中に一時停止したりすることであり、“変更”とは、wind-up</b> ポジションから <b>セットポジション（または、その逆）に移行したり、投球動作から塁への送球（けん制）動作に変更することである。</b>
5.07(d)	投手が、準備動作を起こしてからでも、打者への <u>投球に関連する動作</u> を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。	投手が、準備動作を起こしてからでも、打者への <u>投球動作</u> を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。



6.02(a)(1)	<p>投手板に触れている投手が、<u>投球に関連する動作を起こしながら、投球を中止した場合。</u></p>	<p>投手板に触れている投手が、<b>5.07(a)(1) および(2)項に定める投球動作に違反した場合。</b></p> <p>※OBR は“The pitcher, while touching his plate, makes any motion naturally associated with his pitch and fails to make such delivery.”となっている。このうちの、“such delivery”は「5.07(a)(1) および(2)項に定める投球動作」を示しているものであり、これを“fail”「しそこなう」という考えから、上記の訳とした。</p>
6.02(a)(7)	<p>投手が投手板に触れなくて、投球に関連する動作をした場合。</p>	<p>現行のままとする。</p> <p>※「投球に関連する動作」＝「投球動作」＋「準備動作」または「投球動作を伴わない両手を合わせる動作など」という考え方。</p>
6.02(a)(7)	<p><b>【問】</b> 走者一塁のとき、投手が投手板をまたいだままストレッチを始めたがボールを落とした。ブークとなるか。<b>【答】</b> 投手が投手板に触れなくて、投球に関連する動作を起こしているからブークとなる。</p>	<p>現行のままとする。</p>

## 少年部(中学生)の投球数制限について

2020 年度より少年部の投球数制限を下記の通りといたします。

対象大会は、文部科学大臣杯全日本少年春季軟式野球大会日本生命トーナメント、全日本少年軟式野球大会、全日本中学女子軟式野球大会(SPトーナメント)

※各都道府県大会の導入は、各都道府県支部により異なります。

### 1. 競技に関する連盟特別規則

#### 投球制限【少年部】

現行	改定
投手の投球制限については、肘・肩の障害防止を考慮し、1日7イニングまでとする。ただし、タイブレーク方式の直前のイニングを投げ切った投手に限り、1日最大9イニングまで投げることができる。タイブレークとなった場合に投げることができる投手は、タイブレーク方式の直前を投げ切った投手か、新たな投手（その日1球も投げしていない選手）に限り、1日2イニングまで投げることができる。 ～以下省略～	投手の投球制限については、肘・肩の障害防止を考慮し、下記の通りとする。 ・大会中の1日の投球数…100球 ・1週間の投球数…350球 ※試合中に100球に到達した場合は、その打者が打撃を完了するまで投球できる。  ※少年女子も同様の取り扱いとする。

※上記規則は、2020年3月21日から行われる「文部科学大臣杯第11回全日本少年春季軟式野球大会日本生命トーナメント」より導入する。

### 補足説明

- ① 1日100球以内であり、1日100球を超えない範囲での連投は可能です。
- ② 投手が他のポジションに就いてから、再び投手に戻ることは可能です。
- ③ ボークを宣告されたにも関わらず、投球したものは投球数にカウントする。
- ④ 1週間の投球数350球は、今大会の試合における投球数のみをカウントする。
- ⑤ 試合中に1週間の投球数350球に達した場合は、その打者が打撃を完了するまで投球できる。
- ⑥ 投球数の誤りが発覚した場合は、その打者が打撃を完了するまで投球できる。
- ⑦ 大会本部において投球数の管理を行うが、チーム内においても投手の投球数の管理および投球障害の予防に取り組むこと。



## 【参考資料】ゲームコントロールのために審判員が徹底すべき事項とその対応

(公財) 日本野球連盟 規則審判委員会

本、参考資料は日本野球連盟（社会人）が都市対抗野球のゲームコントロールについて運営審判員にアドバイスしているものです。

適用できる箇所は、全ての野球で積極的に行うことが必要と考えます。

### 1. 妨害またはボークに関する規則の適用

#### ① 妨害に関する規則を的確に適用する。

・プレイが始まる前に、そのときの状況で起こりうる可能性の高い妨害系のプレイを予測する。  
・特に規則 6.03(a)(3)に注意する。打者がバッタースボックスの外に出るか、あるいはなんらかの動作によって、捕手の送球動作を妨害したと球審が判断した場合は、故意であるかどうかに関係なく、妨害のペナルティを適用する。なお、妨害の判断に当たっては、捕手と打者（またはバット）が接触したかどうかや、捕手が実際に送球できたかどうかは関係ない。

#### ② ボークを見逃さない。【6.02 a 原注】の趣旨をよく理解すること。

※ 妨害またはボークに関する対応を誤ると、不利益を受けたチームや観客の信頼を失う。

### 2. 「ミットを動かすな運動」の徹底

① 「ミットを動かすな運動」を徹底する。球審は、遵守しない捕手には、そのたびに注意する。すべての球審が取り組まないと、効果がない。

※ これは日本独特の悪弊であり、各国のアンパイアが日本の野球にマイナスのイメージを持つ原因になっている。WBSC の世界ランキング 1 位（2019 年 6 月 1 日現在）の日本が、マナーの面でも称賛されなければならない。

### 3. 投手の「20秒ルール」の適用

（「社会人及び大学野球における試合のスピードアップに関する特別規則」3）

① 投手がボールを受けてから 18 秒たっても投球動作を開始していない場合は、ボールが投手の手を離れるまでに 20 秒を超える。球審は、その状態で 18 秒を経過したら規則に基づき警告する。なお、セットポジションにおける“完全な静止”の状態は、投球動作ではない。

② 送りバントのケースなど、捕手が内野手にサインを出している間も、計時を継続する。球審は、その状況になったら、そのことを捕手に申し渡す。この規則を出し抜くために捕手がタイムを要求しても、これを認めない。

### 4. バッタースボックスルールの適用（規則 5.04 b(4)(A)、同(B)、アマ内規②）

① 規則の例外規定に該当しないケースのとき（例えば投球を見逃したあとや、監督のサインを見ているときなど）、打者の両足がバッタースボックスから出た場合、球審はジェスチャーと声で打者に注意する。その打者が次に違反したときは、規則に基づき警告する。（アマ内規②）

② 打者が、ファウルを打った後や空振りをした後に、バットに滑り止めをつけたいと要請してきたとき、球審はこれを認めない。それにもかかわらず打者がダートサークルから出た場合、規則に基づき警告する。

③ 打者が、ファウルを打ち一塁に走った後、打席に戻る途中の一連の流れでバットに滑り止めをつけることは認める。しかし、ダッグアウト前まで行くことは認めない。球審は、打者が指示に従わなかった場合、規則に基づき警告する。

- ④ 打者がバントするふりをしてダートサークルを出た場合、球審は規則に基づき警告する。
- ※ 投手にはイニング間の時間やベンチ前のキャッチボール禁止など、各種制限を課している。打者にも規則によるスピードアップルールを厳守させなければならない。
- ※ バッターズボックスルールは、「投手の 20 秒ルール」と連動していることを忘れてはならない。

## 5. 規則 5.10(k)および定義 12 の遵守 (投手のベンチ前キャッチボール禁止の根拠)

- ① 打者と次打者以外の者がダッグアウトから出ていたら (ただ単に出ている、バットを持っている、素振りをしている)、審判員はダッグアウトに入るよう指示する。イニング間に控え選手がファウル地域でウォーミングアップすることは、例外的に許しているに過ぎない。
- ② ベースコーチが、イニング間にグラウンド内のダッグアウト付近にとどまっていたら (打者と打ち合わせ、投手の投球動作を見る)、審判員はダッグアウトの中に入るか、コーチャースボックスに行くよう指示する。

## 6. その他の取り組み

- ① 行動が遅いプレーヤーには、ジェスチャーと声でスピードアップをうながす。
- ② 投手、捕手、打者が球審の判定に不服な態度を示したり、投手が勝手にストライクと決めてマウンドを降りたりした場合、球審は毅然とした態度で注意する。
- ③ 野次は許さない。とりわけ個人を特定した野次を発した者には、審判員は厳重に注意する。
- ④ イニングの第一打者 (または投手が交代したときの打者) は、投手の準備投球中は次打者席にいないなければならない (世界共通のマナー)。ホームプレートに近づくなど不適切な位置にいたら、球審は次打者席に戻るよう指示する。そして、投手に“One more pitch!”を通告したら、打者を打者席に向かわせる。イニングの先頭打者を早く打席につかせることも、スピードアップにつながる。
- ⑤ 一塁ベースコーチがセーフのジェスチャーをしたら、一塁塁審または球審は必ず注意する。その際、次に同じ行動をとったら他の者と交代させることを申し渡す。
- ⑥ 三塁でプレイが行われるとき、審判員はジャッジするための最適な場所 (通常は二塁→三塁の延長線上) にいないなければならない。三塁ベースコーチがその場所にいたら、退くよう指示する。
- ⑦ 二塁打を打った打者が、手袋のみを交換するためにタイムを要求した場合、これを認めない。
- ⑧ 控え選手が、一塁走者になった打者のレッグガードなどを受け取りに来た場合、コーチャースボックス内で待機させる。

## 7. 審判員の心構え

- ① 審判員は試合のコントローラーである。毅然としていながらも真摯な態度で (横柄な態度は厳に慎む)、野球規則にのっとり、試合を進行させる権限と責務がある (規則 8.01(b))。そして、それと同時に、次の規則の趣旨を理解し、試合においてハッスルした行動をとり、ゲームをコントロールすること。

### 【審判員に対する一般指示 (抜粋)】

試合を停滞させてはならない。試合は、しばしば審判員の活気ある真剣な運びによって、より以上の効果をもたらすものである。

以上

『内野手の側方を通過した打球に走者が当たった場合』

【問題】

無死二、三塁。内野手は、前進守備のシフトを取っています。打者の打球はセンターへ抜けそうな鋭いゴロとなりました。前進守備で守っていた遊撃手が打球の方向へ2～3歩ステップして飛びつきましたが少し及ばず、打球はセンターに向かっています。

二塁走者はベースに戻ろうとしていましたが、打球が抜けそうになったために三塁にスタートを切った瞬間、打球に当たってしまいました。

走者に当たった打球は、方向が変わりライト側のファウル地域に向かって転がっています。三塁走者は得点。打球に当たった二塁走者もボールが転がっている間に本塁に向かい、余裕でセーフとなりました。打者走者も送球間に二塁に達しました。

このプレーで塁審は、打球が走者に当たった時に「Nothing」のシグナルを出していました。走者に打球が当たった場所は、明らかに遊撃手を通過した後ろでした。さて、この場合の処置は、審判員の判定どおりで良かったのでしょうか？

以下の文章の中で最も正しいと考えられるものを選んでください。

- ① 打球が内野手を通過してから走者に当たっているため、塁審の判定どおり「Nothing」で、インプレイでプレイは続けられます。2点が追加されて無死二塁で再開されます。
- ② 内野手を通過した打球でも基本的には打球に走者が当たったらアウトが宣告されます。ただし、例外として一度野手に触れた打球か、野手の股間または側方のすぐ後ろで当たった場合はアウトになりません。このケースでは、遊撃手が飛び込んだすぐ脇を通った打球に当たったのでインプレイとなります。2点が追加されて無死二塁で再開されます。
- ③ 内野手を通過したかどうかにかかわらず、フェアの打球に当たった走者はアウトになります。従って、走者アウトでボールデッドとなり、ほかの走者は進塁できません。一死一、三塁で試合を再開します。

## 【回答&解説】

### ③の記述が正しいと考えられます。

この規則の解釈に関して、わが国でも長年議論が交わされてきました。2019年シーズンより、MLBの公認野球規則で文章が改訂され、この規則の解釈がようやく統一されました。20年シーズンより日本でもMLBに合わせた解釈に統一されます。

昨年までの規則書には、以下の記述があることから、このようなケースの解釈をしてきました。

**5.09アウト(7)「走者が、内野手（投手を含む）に触れていないか、または内野手（投手を除く）を通過していないフェアボールに、フェア地域で触れた場合。」 6.01打者または走者の妨害(11)「野手（投手を含む）に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者に触れた場合。」**

特に上記5.09の「内野手（投手を除く）を通過していないフェアボールに、フェア地域で触れた場合」の記述から、多くの方々が内野手を通過した打球に当たった場合には、アウトにならないという解釈を取っていました。20年の規則書ではこの部分が削除され、「走者が、フェアボールにフェア地域で触れた場合。」と分かりやすい表現に変わります。今年度からは、フェアボールがフェア地域で走者に触れた場合には、基本的にすべてアウトになると考えてください。

ただし、例外はあります。6.01 (11)(2019年の規則書での項目番号)の後段に、「ただし、走者がフェアボールに触れても、(A)いったん内野手（投手を含む）に触れたフェアボールに触れた場合 (B)1人の内野手（投手を除く）に触れないでその股間または側方を通過したフェアボールに、すぐその後方で触れても、この打球に対して、他のいずれの内野手も守備する機会がない場合には、審判員は走者が打球に触れたという理由でアウトを宣告してはならない。」とありますので、この例外以外のフェアボールにフェア地域で触れた場合に走者はアウトとなります。

②の回答で、野手の側方を通過した打球という解釈でインプレイとしていますが、側方の解釈は、野手がもともといた位置のすぐ側方だけというのが一般的です。野手が打球を捕ろうとして数歩でも動いたのならば、側方を通過した打球という判断にはなりません。

従って、フェアボールがフェア地域で走者に触れている今回のケースは、シンプルに③の回答が最も正しいと言えるのです。

本年度、競技者必携更新に伴う訂正箇所です。特に赤字項目を確認しご理解下さい。

- 1) スピーディーに試合を展開するために を追加挿入しました。・・・目次の前頁
- 2) 野球競技場区画線（学童部）の右下余白に4年生以下の投手本塁間・塁間を追記しました。  
・・・4頁 投手本塁間 14m ・ 塁間 21m
- 3) 全国大会に参加するチーム・審判員の注意事項について・・・15頁  
全国大会に参加するチームの項に、審判員の注意事項大会審判員についてを追記しました。
  1. 大会審判員は、毎年登録した全日本軟式野球連盟公認審判員が任にあたる。
  2. 全国大会の派遣は、60歳以下の指導員としその年の各ブロック指導員研修会に参加した者とする。
- 4) ベンチの入れ替えについて・・・16頁・24頁  
チームが2試合続けて行う場合は、ベンチの入れ替えをしないことがある。を追記しました。
- 5) 特別継続試合について・・・19頁・26頁  
特別継続試合は、1日2試合に抵触しないと明記しました。
- 6) ベンチ前のキャッチボール禁止について・・・19頁・27頁  
ブルペンでのキャッチボールは2組4名以内を認めることにしました。
- 7) 試合前後の挨拶について（一般）・・・19頁  
挨拶はホームプレートを挟んで球審の合図で行う。これですべて完了する。  
試合に敬意を表し本部役員も起立し挨拶をする。を追記しました。
- 8) 7回戦の試合について・・・20頁
  - ①国民体育大会の順位決定戦は時間制限はないことを明記しました。
  - ②全日本シニアに限り、得点差によるコールドゲームを5回以降7点差と追記しました。
- 9) 延長戦について・・・21頁
  - ①天皇賜杯大会、国民体育大会では、試合開始後、3時間を経過した場合のみ、新しい延長イニングに入らないを明記しました。
  - ②マスターズ、全日本シニア大会の延長戦は9回（最長2回）まで、もしくは試合開始後、2時間30分を経過した場合は、新しい延長イニングに入らない。を追記しました。
- 10) 指名打者の取り扱いについて・・・23頁  
日本スポーツマスターズおよび全日本シニアは、指名打者制度を掲載しました。
  - (1)指名打者について
    - ①指名打者を採用するか、しないかはチームの任意である。
    - ②投手に替わって指名打者を採用できる。
    - ③試合開始前に指名打者を指名しなかった場合は、その試合で指名打者を使うことはできない。  
(指名打者の打順は変更できない)

④指名打者は相手チームの先発投手に対して、少なくとも1回は打撃を完了しなければならない。  
その先発投手が替わった場合はその必要はない。

⑤指名打者は代走者にはなれない。

(2)指名打者制度が消滅する基準

①指名打者が守備に付いた場合

②投手が他の守備位置についた場合。

③代打者または代走者が投手となった場合

④投手が指名打者に替わって打撃をするか、走者になった場合。

⑤他のプレーヤーが投手になった場合。

⑥投手が打順に入った場合。

11) 試合の挨拶について (学童部・少年部) . . . 27頁

試合の挨拶は、試合前後の本塁整列の挨拶が全てであり、相手・大会本部への挨拶は不要である。

(応援団への挨拶は奨励) 試合に敬意を表し本部役員も起立し挨拶をする。を記載しました

12) 少年部、学童部、女子大会のタイブレーク方式について . . . 28頁

投球制限を遵守の上、勝敗が決するまで続行する。ことにしました。

13) 学童部・少年部の投球制限について . . . 30頁

1人の投手が、1日に投球できる数を下記の取り扱いとする。を明記しました。

【学童部】

・1日の投球数 : 70球以内 (4年生以下60球以内)

【少年部】 (内容通達)

・1日の投球数 : 100球以内

・1週間の投球数 : 350球以内

①試合中規定投球数に達した場合、その打者が打撃を完了するまで投球できる。

②ボークにもかかわらず投球したものは、投球数に数える。

③タイブレークになった場合、1日規定投球数以内で投球できる。

④牽制球や送球とみなされるものは投球数としない

⑤投球数の管理は、大会本部が行う。

14) タイムの回数について . . . 33頁

①監督またはコーチ等が投手のもとへ行く回数・守備側のタイムの回数・攻撃側のタイムの回数を試合のスピード化に集約しました。

②それぞれ、延長戦 (タイブレーク方式を含む) は、1イニングに1回行くことができるにしました。

15) 9回戦の試合目標時間について . . . 34頁

競技時間は120分以内を目標とする。に現実的な時間設定にしました。

16) 投手のボールを受けてからの時間について . . . 35頁

試合のスピード化に関する事項に下記を掲載しました。

投手は、捕手、その他の内野手または審判員からボールを受けた後、走者がいない場合には12秒以内、走者がいる場合は20秒以内に投球しなければならない。違反した場合、走者が塁にいない場合はただちにボールを宣告し、走者がいる場合は警告を発することとし、同一投手が2度繰り返したら、3度目からはその都度ボールを宣告する。

17) レッグガードとエルボーガードを外す時のタイムについて . . . 36頁

外す時のタイムは認めるが速やかに行うこと。と記載しました。

18) 投手のサングラスの取り扱いについて . . . 38頁

投手は、使用できない。と明示しました。

- 19) バットの使用制限について・・・39頁  
バットは改造、加工したものは使用できないにしました。
- 20) 臨時代走について・・・47頁  
前位の者、ただし投手を除くにしました。
- 21) 先発投手の勝利投手の投球回数の基準について・・・50頁  
7回戦の先発投手の勝投手、負投手の基準は4回とする。5回戦は3回とする。としました。
- 22) 用語の統一について・・・98頁・123頁  
問中の挟撃をランダウンプレイに統一しました。  
(例3) 二・三塁間でランダウンプレイ中、……
- 23) 問中の規則適用上の解釈の変更に伴う回答の修正について・・・138頁  
2019年版 問87を削除し、問88以降2020年版で繰り上げ、問87の答の文書を一部削除しました。
- 24) 審判上の注意すべき事項について・・・164頁  
投手の投球動作の解釈の変更に伴い文書の差し替えをしました。  
打者への投球動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。“中断”とは、投手が投球動作を起こしてから途中でやめてしまったり、投球動作を一時停止したりすることであり、“変更”とは、ワインドアップポジションからセットポジション（または、その逆）に移行したり、投球動作から塁への送球（けん制）動作に変更することである。
- 25) 振り逃げの際のジェスチャー・・・171頁  
投球の判定の項にノーキャッチのジェスチャーをするを追加しました。
- 26) インターフェアのシグナルの変更について  
左手から右手に変更しました。
- 27) インターフェアの宣告について・・・178頁・184頁・185頁  
**【反則打球】**  
球審は「タイム」を宣告し、右手で打者を指さして「反則打球」と宣告し、続いて「バッターアウト」と・・・  
**【打撃妨害】**  
球審は「タイム」と宣告し、続いて捕手を右手で指さして「打撃妨害」または「インターフェア」をコールする。球審は右手で捕手を指さして「打撃妨害」または「インターフェア」を宣告する。  
**【反則打球】**  
「ボール」「ストライク」をコール（投球判定を行う）、直後に右手で打者を指さして「インターフェア」を宣告し、・・・
- 28) 宣告用語の変更について・・・183頁・184頁  
テイク○○を「ユー・○○ベース」または「ランナー・○○ベース」に変更をしました。
- 29) コールドゲームについて・・・189頁  
処置手順を明記しました。  
降雨のためコールドゲームとなる場合は、大会本部で両チーム監督に対し、コールドゲームになる旨を説明し、球審はホームプレートに出て「ゲーム」を宣告した後、場内放送を行う。
- 30) チーム及び会員について・・・規律関係集23頁 連盟規程  
第6条の表現と範囲が明確化されました。  
(1) 一般チーム（壮年部含む）  
(2) 少年チーム（少年部・学童部）  
2 一般チームは、次のいずれかに該当する者で編成されたチームをいう。

- ①職域チームは、官公庁、会社、商店、工場等に勤務する者のみによって編成するチーム、または同一企業に勤務する者～（以下省略）
  - ②クラブチームは、支部の地域内および隣接都道府県に居住、または勤務する者のみによって編成するチーム。なお、隣接都道府県居住者の登録は、全登録者の1/3以内とする。
  - ③少年チームは、少年部と学童部とし、支部の地域内および隣接都道府県に居住する者で編成されたチームをいう。なお、隣接都道府県居住者の登録は、全登録者の1/3以内とする。
- 31) 会員の登録について・・・規律関係集24頁 連盟規程  
第10条3および6の一部文書が削除されました。  
3・・・また、支部をまたがり登録する場合は、連盟の承認を必要とする。を削除
- 32) 連盟競技者規程について・・・規律関係集43頁 競技者規程  
日本スポーツ協会の略名が日体協からJSPOになりました。  
第1条 この規程は、公益財団法人全日本軟式野球連盟（以下「連盟」という。）が公益財団法人日本スポーツ協会（以下「JSPO」という。）～（以下省略）



## アマチュア野球内規（2020年）

### 序

この内規集は、公認野球規則適用上のアマチュア野球規則委員会の統一解釈を収録したもので、公認野球規則と同等の効力を持つものである。なお、この内規は、2020年のルールに基づいたものであり、今後ルール改正があれば、適用上の解釈にも変更が加えられるかもしれないことをお断りしておく。

2020年2月  
一般財団法人全日本野球協会  
アマチュア野球規則委員会

### 目次

- ① 次回の第1打者
- ② バッターズボックスルール
- ③ ワインドアップポジションの投手
- ④ 最終回裏の決勝点
- ⑤ 2アウト、四球暴投、決勝点で打者一塁へ進まず
- ⑥ アウトの時機
- ⑦ アピールの場所と時期
- ⑧ 審判員がインプレイのとき使用球を受け取る
- ⑨ 打者の背後にウェストボールを投げる
- ⑩ 危険防止（ラフプレイ禁止）ルール
- ⑪ 投手の遅延行為 ⑫ 投球する手を口または唇につける ⑬ 正式試合となる回数

## ① 次回の第1打者

たとえば2アウト、打者のボールカウント1ボール2ストライク後の投球のときに、三塁走者が本盗を企てたが得点とならないで攻守交代になったような場合、次回の第1打者を明らかにするため、球審は、打者が三振でアウトになったのか、走者が触球されてアウトになったのかを明示しなければならない。（規則 5.04 a (3)、5.09 a (14)）

## ② バッターズボックスルール

(1) 打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッターズボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッターズボックスを離れてもよいが、“ホームプレート”を囲む土の部分、を出てはならない。

- 1) 打者が投球に対してバットを振った場合。
- 2) チェックスイングが塁審にリクエストされた場合。
- 3) 打者が投球を避けてバランスを崩すか、バッターズボックスの外に出ざるを得なかった場合。
- 4) いずれかのチームのメンバーが“タイム”を要求し認められた場合。
- 5) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。
- 6) 打者がバントをするふりをした場合。
- 7) 暴投または捕逸が発生した場合。
- 8) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分から離れた場合。
- 9) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。

(2) 打者は、次の目的で“タイム”が宣告されたときは、バッターズボックスおよび“ホームプレート”を囲む土の部分、を離れることができる。

- 1) 負傷または負傷の可能性がある場合。
- 2) プレーヤーの交代
- 3) いずれかのチームの協議

なお、審判員は、前の打者が塁に出るかまたはアウトになれば、速やかにバッターズボックスに入るよう次打者に促さねばならない。

### ペナルティ (1) ・ (2)

打者が意図的にバッターズボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ(1)の1)～9)の例外規定に該当しない場合、または、打者が意図的に“ホームプレート”を囲む土の部分、を離れてプレイを遅らせ、かつ(2)の1)～3)の例外規定に該当しない場合、球審は、その試合で2度目までの違反に対しては警告を与え、3度目からは投手の投球を待たずにストライクを宣告する。この場合はボールデッドである。

もし打者がバッターズボックスまたは“ホームプレート”を囲む土の部分、の外にとどまり、さらにプレイを遅延させた場合、球審は投手の投球を待たず、再びストライクを宣告する。

なお、球審は、再びストライクを宣告するまでに、打者が正しい姿勢をとるための適宜な時間を認める。（規則 5.04 b (4)(A)、同(B)）

### ③ ワインドアップポジションの投手

ワインドアップポジションをとった右投手が三塁（左投手が一塁）に踏み出して送球することは、投球動作を変更して送球したとみなされるから、ボークとなる。（規則 6.02 a (1)）

投手が投球動作を起こして両手を合わせた後、再び両手をふりかぶることは、投球を中断したものとみなされる。 投球動作を起こしたときは、投球を完了しなければならない。（規則 5.07 a (1)）

### ④ 最終回裏の決勝点

正式試合の最終回の裏かまたは延長回の裏に、規則 6.01 (g) 規定のプレイで 三塁走者に本塁が与えられて決勝点になる場合には、打者は一塁に進む義務はない。（規則 5.08 b、6.01 g）

### ⑤ 2アウト、四球暴投、決勝点で打者一塁へ進まず

最終回裏、走者三塁、打者の四球（フォアボール）目が暴投または捕逸となって決勝点が記録される時、四球の打者が一塁へ進まなかった場合は、規則 5.08 (b) のように球審が自ら打者のアウトを宣告して、得点を無効にすることはできない。

打者が一塁に進まないまま、守備側が何らの行為もしないで、両チームが本塁に整列すれば、四球の打者は一塁へ進んだものと記録される。

打者をアウトにするためには、両チームが本塁に整列する前に守備側がアピールすることが必要である（規則 5.09 (c) [5.09 c 原注] [注 2]）。しかし、守備側がアピールしても、打者は一塁への安全進塁権を与えられているので、打者が気づいて一塁に到達すれば、アピールは認められない。

守備側のアピールを認めて打者をアウトにする場合は、

- 1) 打者が一塁に進もうとしないとき
- 2) 打者が一塁に進もうとしたが途中から引き返したときである。

（規則 5.08 b、5.09 c [5.09 c 原注] [注 2]）

### ⑥ アウトの時機

アウトが成立する時機は、審判員が宣告したときではなくて、アウトの事実が生じたときである。第3アウトがフォースアウト以外のアウトで、そのアウトにいたるプレイ中に走者が本塁に達するときなどのように、状況によっては速やかにアウトを宣告しなければならない。（規則 5.08 a [注 1]）

### ⑦ アピールの場所と時期

守備側チームは、アピールの原因となった塁（空過またはリタッチの失敗）に触球するだけでなく、アピールの原因でない塁に進んでいる走者の身体に触球して、走者の違反を指摘して、審判員の承認を求める（アピール）ことができる。この場合、アピールを受けた審判員は、そのアピールの原因となった塁の審判員に裁定を一任しなければならない。

アピールは、ボールインプレイのときに行わなければならないので、ボールデッドのときにアピールがあった場合は、当該審判員は「タイム中だ」ということとする。（規則 5.09 c）ただし、最終回の裏ボールデッド中に決勝点が記録された場合、または降雨等で試合が中断され、そのまま試合が再開されない場合、ボールデッド中でもアピールはできるものとする。

### ⑧ 審判員がインプレイのとき使用球を受け取る

3アウトと勘ちがいした守備側が、使用球を審判員に手渡したのを審判員が受け取った場合は、規則 6.01(d)を準用する。審判員が使用球を受け取ると同時にボールデッドとし、受け取らなかったらどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。また、ベースコーチが同様のケースで試合球を受け取った場合も、受け取ると同時にボールデッドとするが、走者はボールデッドになったときに占有していた塁にとどめる。(規則 6.01 d)

### ⑨ 打者の背後にウェストボールを投げる

投手がスクイズプレイを防ぐ目的で、意識的に打者の背後へ投球したり、捕手が意識的に打者の背後に飛び出したところへ投球したりするような非スポーツマン的な行為に対しても規則 6.01(g)を適用し、走者には本塁を与え、打者は打撃妨害で一塁へ進ませる。(規則 6.01 g)

### ⑩ 危険防止(ラフプレイ禁止)ルール

本規則の趣旨は、フェアプレイの精神に則り、プレーヤーの安全を確保するため、攻撃側および守備側のプレーヤーが意図的に相手に対して体当たりあるいは乱暴に接触するなどの行為を禁止するものである。

1. タッグプレイのとき、野手がボールを明らかに保持している場合、走者は(たとえ走路上であっても)野手を避ける、あるいは減速するなどして野手との接触を回避しなければならない。

- 1) 野手との接触が避けられた
- 2) 走者は野手の落球を誘おうとしていた
- 3) 野手の落球を誘うため乱暴に接触した

と審判員が判断すれば、その行為は故意とみなされ、たとえ野手はその接触によって落球しても、走者にはアウトが宣告される。ただちにボールデッドとなり、他の走者は妨害発生時に占有していた塁に戻る。なお、走者の行為が極めて悪質な場合は、走者は試合から除かれる場合もある。(規則 6.01 i (1))

2. 次の場合には、たとえ身体の一部が塁に向かっていても、走者には妨害が宣告される。

(1) 走者が、ベースパスから外れて野手に向かって滑ったり、または走ったりして野手の守備を妨げた場合(接触したかどうかを問わない)。

《走者は、まっすぐベースに向かって滑らなければならない、つまり走者の身体全体(足、脚、腰および腕)が塁間の走者の走路(ベースパス)内に留まることが必要である。ただし、走者が、野手から離れる方向へ滑ったり、走ったりすることが、野手との接触または野手のプレイの妨げになることを避けるためであれば、それは許される。》

(2) 走者が体を野手につけたりして、野手の守備を妨害した場合。

(3) 走者のスライディングの足が、立っている野手の膝より上に接触した場合および走者がスパイクの刃を立てて野手に向かってスライディングした場合。

(4) 走者がいずれかの足で野手を払うか、蹴った場合。

(5) たとえ野手がプレイを完成させるための送球を企てていなくても、走者がイリーガリーに野手に向かってスライドしたり、接触したりした場合。

#### ペナルティ (1) ~ (5)

- 1) フォースプレイのときの0アウトまたは1アウトの場合、妨害した走者と、打者走者にアウトが宣告される。すでにアウトになった走者が妨害した場合は、守備側がプレイを試みようとしている走者にアウトが宣告される。ただちにボールデッドとなり、他の走者は妨害発生時に占有していた塁に戻る。
- 2) フォースプレイのときの2アウトの場合、妨害をした走者にアウトが宣告され、ただちにボールデッドとなり、他の走者は進塁できない。
- 3) タッグプレイの場合、妨害をした走者にアウトが宣告され、ただちにボールデッドとなり、他の走者は妨害発生時に占有していた塁に戻る。
- 4) 走者のスライディングが極めて悪質な場合は、走者は試合から除かれる場合もある。

(規則 5.09 b(3)、6.01 i(1)、6.01 j)

3. タッグプレイのとき、捕手または野手が、明らかにボールを持たずに塁線上および塁上に位置して、走者の走路をふさいだ場合は、オブストラクションが厳格に適用される。

なお、捕手または野手が、たとえボールを保持していても、故意に足を塁線上または塁上に置いたり、または脚を横倒しにするなどして塁線上または塁上に置いたりして、走者の走路をふさぐ行為は、大変危険な行為であるから禁止する。同様の行為で送球を待つことも禁止する。このような行為が繰り返されたら、その選手は試合から除かれる場合もある。

#### ペナルティ

捕手または野手がボールを保持していて、上記の行為で走者の走路をふさいだ場合、正規にタッグされればその走者はアウトになるが、審判員は捕手または野手に警告を発する。走者が故意または意図的に乱暴に捕手または野手に接触し、そのためたとえ捕手または野手が落球しても、その走者にはアウトが宣告される。ただちにボールデッドとなり、他の走者は妨害発生時に占有していた塁に戻る。(規則 6.01 h、6.01 i(2))

#### ⑪ 投手の遅延行為

走者が塁にいるとき、投手が投手板から軸足をはずして、走者のいない塁に送球した(送球するマネも含む)場合、または、投手板上からでも軸足を投手板からはずしても、塁に入ろうとしていない野手に送球した場合には、投手の遅延行為とみなす。(規則 6.02 a(4)、6.02 a(8)、6.02 c(8))

#### ⑫ 投球する手を口または唇につける

規則 6.02(c)(1)のペナルティに代えて、審判員はその都度警告してボールを交換させる。(規則 6.02 c)

#### ⑬ 正式試合となる回数

審判員が試合の途中で打ち切りを命じたときに正式試合となる回数については、規則 7.01(c)に規定されているが、各種大会などでは、この規定の適用に関して独自の特別規則を設けることができる。

大会によっては、一定以上の得点差、たとえば、5回10点差、7回以降7点差など、得点差によってコールドゲームとし、正式試合とする特別規則もある。(規則 7.01 c)